

カンボジア 工場労働者のための子宮頸がんを入口とした 女性のヘルスケア向上プロジェクト

Newsletter from SCGO-JSOG Project on Women's Health and Cervical Cancer

No. 26 January 2018

第二回子宮頸がん検診（母子保健センターにて）

2018年1月14日～16日の3日間、母子保健センターにて、第二回目の集団子宮頸がん検診を行いました。今回の検診の対象者は、日系企業1社およびプノンペンバス公社のスタッフ、無料キャンペーンの一般受診者とし、計142名が受診しました。

検診に先立ち、準備会議を二回開催し、検診にかかわるスタッフ全員でプロトコルの再確認、外来の配置の確認、当日のそれぞれの役割分担、受診者の流れを確認し、シミュレーションを繰り返し行いました。

検診当日、受診者は8時開始の案内にもかかわらず、7時には病院に到着し、まだかと待っている方もいました。検診は、準備の甲斐もあり、順調に進みました。

病院での子宮頸がん検診の流れ

<検診準備会議>



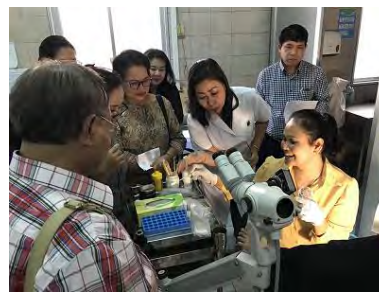
<1回目>

検診にかかわるスタッフ全員で検診のプロトコルの合同再確認

前回（2016年6月）プノンペン経済特区で検診を行ったクメールソビエト病院の医師たちが、自分たちの経験をもとにアドバイスや注意事項を話してくれました!!

<2回目>

検診にかかわるスタッフ全員で検診を行う病院外来に移動し、当日の配置、受診者の流れ、それぞれの役割の確認を行いました。



<検診当日>



受付開始前から沢山の受診者が待っていました。



受診者は、持参した個人IDカードを提出し、助産師が、事前登録した参加者リストと照合



受付で受診者にそれぞれバーコードを発行し、アンケートやインフォームドコンセントが書かれた用紙と検体容器を渡す



看護師/助産師の問診、インフォームドコンセントへのサイン



看護師/助産師により個人IDカードの名前、用紙の名前、検体容器の名前の確認



受診者を診察室に案内し、本人、用紙の名前、検体容器の名前の再確認



検診

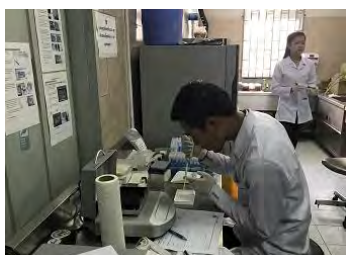


最後に、検診結果の返却方法の説明と質疑応答

受診者帰宅



採取後の検体は、実施医師→事務局スタッフ→検査室の検査技師へ運ばれ、その都度検体と名簿の照合を実施



検査室で careHPV を用いて HPV 検査を実施



医師、看護師/助産師、事務局スタッフ、検査技師、日本人関係者によるフィードバックミーティング

日本産科婦人科学会員の医師による実地指導

2018年1月9日～16日の間、順天堂大学より太田剛志医師、名古屋大学より玉内学志医師が派遣され、プロジェクト対象のクメールソビエト病院、カルメット病院、国立母子保健センター病院での技術指導、下平使用のピットフォール、患者登録管理や診療録についてのミニレクチャーの実施、さらに症例検討会を開催しました。

名古屋大学産婦人科 玉内学志
順天堂大学産婦人科 太田剛志

2018年1月9日より16日まで、JICA 草の根技術協力事業への日本産科婦人科学会からの医師派遣事業として、カンボジアのプノンペンを訪問しました。国立3病院への訪問・指導、ミニレクチャー等を行い、そして第2回目の工場労働者に対する子宮頸がん検診の準備および立ち会いをしました。

工場労働者への集団検診は、プロジェクト当初は細胞診ベースを予定しておりましたが、技師や病理医不足の問題などから、HPV test(high risk 14typeの有無を検出する)に切り替える方針となりました。日程調整の事情で、工場ではなく病院外来に受診者を集めることとなったため、受付や内診台のレイアウトセッティングも最低限で済み、大きな混乱はありませんでしたが、長きにわたり協議を重ね、物品の確保や現地スタッフへの指導やリハーサル、患者識別IDの導入など尽力していただいた現地スタッフの成果が発揮されたものであり、次回以降予定される2次検診にもつながる大きな一歩になりました。

カンボジア初の子宮頸がん集団検診に立ち会うなど貴重な機会を賜り、JICAはじめ日本産科婦人科学会に感謝申し上げます。また、現地でいろいろとコーディネートしてくださった国際医療研究センターの上田あかね先生、石岡未和様、藤田則子先生、JSOGカンボジア事務所の野中愛恵様、他スタッフの方々に感謝申し上げます。



(写真) 子宮頸がん検診の様子



(写真) ミニレクチャーの様子



(写真) 感謝状授与式



プロジェクトを取り巻く動き

- 12/10-1/15 : 上田あかね医師カンボジア派遣
- 1/3 : プラセンタプロトコール会議
- 1/4-1/31 : 石岡未和助産師カンボジア派遣
- 1/7-1/17 : 藤田則子医師カンボジア派遣
- 1/9,12 : 子宮頸がん検診準備委員会
- 1/9-1/15 : 太田剛志医師、玉内学志医師
カンボジア派遣
- 1/14-16 : 母子保健センターにて第2回
子宮頸がん検診実施
- 1/17 : 子宮頸がん検診反省会
- 1/29 : 健康教育の評価についての報告会



(写真) 感謝状授与式後の集合写真

工場での健康教育活動の評価

2018年1月4日から31日の間、国立国際医療センター国際医療協力局より石岡未和助産師がカンボジアに派遣されました。2017年5月に続き3回目の派遣です。今回は、これまでの健康教育活動のレビューを行い、また、これまで工場で行われてきました健康教育活動の実施者、工場の健康教育関係者、受益者、および健康教育にかかわりました日本人関係者にインタビューを行いました。さらに、各健康教育活動の報告書のまとめ方や評価方法の指導等を行いました。

国立国際医療研究センター国際医療協力局

石岡未和

工場の女性労働者を対象にした包括的な子宮頸がん対策事業の中で、健康教育活動は、工場労働者が女性の健康に関する知識を深め子宮頸がん検診受診につながることを目的として実施してきました。

今回私は、プロジェクト終了に向けて、健康教育活動による影響と変化を評価することを目的に派遣となり、活動報告書などのドキュメントレビューと関係者へのインタビューを行いました。インタビューは健康教育実施者(医師4名、助産師1名、事務局員1名)、許可を得ることができた1工場の関係者(管理者1名と健康教育担当スタッフ3名)と受講者(女性工員10名)を対象に実施しました。

【結果】活動実績は、2016年8月から2017年10月までに、対象工場は6工場に拡大、計15回の健康教育を実施し、延べ2,616名(女性:2,459名、男性:109名、不明:48名)が参加しました。詳細データが得られた女性1,611名について、平均年齢23.6歳、約59.1%が未婚で、学歴は小学校卒業と中卒を合わせて76.8%と教育水準が高はありませんでした。

インタビューでは、SCGO 医師らは『女性たちが専門家からのアドバイスを必要としていることがわかった。病院にはたくさんの女性工場労働者達がチェックに来るため今後の健康教育に活かすことができる。』と新しい気付きとともに、『JSOGのおかげで日系工場にて実施する機会を得ることができた。女性工員に検診を実施することは簡単ではないと考えていたが、健康教育を実施することによってスタッフや工員たちのコミットメントを得ることができ、検診を実施できた。』と話し、学会としての自信につながっていました。また、工場管理者は『従業員の健康管理の必要性を常に感じていたが、どうすれば良いか分からなかったので良い機会だった。健康教育をプラスと捉える従業員が多く、スタッフのモチベーション向上につながった。』と話され、健康教育活動を従業員にとって貴重な機会として捕らえ、その有効性を認識し、継続希望が強いことが明らかになりました。女性工員へのインタビューには限りがありましたが、ほとんどの人が『自分の健康を守るために役立つ知識が得られた』と回答し、“新しく学んだ知識は何か？”と質問すると、以下の8項目(①手洗い、②食品の衛生、③部屋の清潔、④寝室の清潔、⑤生理期間中に身体の清潔を保つこと、⑥家族計画の方法について、⑦家族計画の使い方について、⑧緊急避妊ピル)が回答に挙がりました^{注1)}。女性工員達は地方出身者が多く、これまで健康に関する教育を受ける機会がほとんどなかったため、自らの健康や基本的な衛生や生理について知らなかったことが改めて明らかになりました。

以上から、工場での健康教育を継続する意義は高く、工場関係者とSCGO学会関係者は、両者ともに健康教育活動の継続を希望しています。今回明らかになった実施上の困難点を克服するために、女性工員らが理解を深め、検診につなげるための効果的な教育方法や評価方法について再検討しているところです。

インタビューを通じて、JSOGとSCGOが築いてきた偉業に胸が熱くなりました。このような貴重な機会を賜り、JICA、JSOGはじめ、SCGOの先生方、SCGO事務局の野中さんをはじめ多くのスタッフの皆様に深く感謝申し上げます。

注1)今回インタビューを実施した1工場で行われた健康教育内容は、3つのテーマ(1. Basic Hygiene and Women's body/Health, 2. Birth Spacing, 3. Care during pregnancy)であり、子宮頸がんは含まれていない。